

イスラエルへの旅（1960）

§ 1 事のおこり

Amos de-Shalit はイスラエルの生れ、高等教育はスイスで受けた。 PhD は Zurich の ETH より。そこでの同級生に Val Telegdi が居た。両者共よくでき、夫々核理論と核実験（のちに素粒子実験）の分野で大活躍をすることになる。

所で、Viki Weisskopf は Manhattan Project の終了した戦後、MIT に居つく。やがて、Viki は Visiting Prof. として Paris に一年ゆく。Viki は Wien の都心に生まれたユダヤ系の男。子もりはフランスのおばさんだったので、子供のフランス語は堪能。しかし大人の（インテリの）フランス語はしゃべれなかった。戦後のパリ滞在はまともなフランス語を修得する好機となった。パリでの物理の講義は勿論フランス語。時々パリの学生や同僚からフランス語の訂正を受けたとか。

CERN の TH DIV で Y が Viki にあった時（1957, 1958, ----）、Viki は Y に云った：「ぼくはウィーン生れ、アメリカに大分居たが、今尚、英・佛語には手を焼く。本をよむにもドイツ語に比べ、英語のものは2倍、佛語のものは3倍かゝる。」

Y は内心考えた：Y の日・英・独・・・の本を読むスピードの比はどうか・・・と。Y にはかねて英・佛語ペラペラの Viki にひがみを十分に感じて居たのだから（Viki にとって独語は mother tongue である）。

Viki は戦後のパリ滞在中に昔の師匠の Pauli をスイス、Zurich の ETH に訪れる。そこで出色の大学院大学生 Amos と Val にあふ。この件については既に述べた（PANIC の項 参照）。

Amos は Zurich で医学専攻のユダヤ系女子学生に会ふ。それが Mrs. de-Shalit となる。

Amos 夫妻は Weizmann Inst. のある Rehovot に住む。夫は Weizmann Inst. で理論物理学者として働き、妻は医者として、往診もしていた。

Amos は若くして核理論で芽を出し、1958 subbatical で CERN Th. Div. にきたときには、母国イスラエルでは Weizmann Institute の所長だった。nuclear shell model の papers (th.) で有名な男でもあった。

CERN Th Div. で Amos は Y のとなりに office をもらってゐた。Viki も CERN の visitor、しかもすぐに CERN の DG 予定者となる。Viki と Amos は共に核屋だから、しゅっちゅう（CERN 内で）行き来して物理、etc, の議論をして居た。となりの Amos の office に N.P. (Th. 又は Exp.) のお客や Viki がきて、話が面白そうになると、Y は Amos の office に乗りこんで、話に加はる。

かうして Amos と Y は大のなかよしになった。すぐにお互に dinner に呼び、

呼ばれるようになる。4人のときもあるが、しばしば他の couples もまじえての dinner party の方が多かった。時には Viki 夫妻も加はる。

こんななかから、PANIC の第一回が企画されて行ったことは、既にのべた。

Amos は帰国してのち、Y の一家をイスラエルへ招待してくれた。Yy と一オをこしたばかりの幸夫の3人の往復旅費 (air fare、エコノミー) と滞在費つきである。これがわれわれのイスラエル行きの背景である。時期は Pass-over の直前の一週間——Pass-over には世界中の Jews が故国にもどって祝いたがって、イスラエルのホテル、宿泊施設は満杯。だからその時期は (ユダヤ教徒でない) われわれはさけてくれという訳だ。

§2 イスラエルへ

さうした訳で、Genève から Pass-over の直前一週間をイスラエル visit に出かけ、帰りはアテネに数日滞在して Genève にもどるといふスケジュールを立てた。

ギリシャ行きを加えたのは、CERN の Th. Div. に来て居たギリシャの核物理学者カネロポロスが母国へ帰りギリシャ AEC とデモクリトス研究所のボスになってゐて、アテネにぜひ寄れとさそってくれたからである。

ラホボ着

Tel Aviv の空港には、Weizmann Inst. の人がむかへにきていて、Weizmann Inst. の (外人) 宿舍まで送りつけてくれた。ラホボはワイツマン研究所のある町である。

Inst. の食堂の場所を教へてもらいひ、又ミルクは朝しか買へないから、子供用にミルクは朝のうちに沢山買っておくようにとのことだ。イスラエルのきまりによれば親と子を一しょに食べてはいけない。親子丼などはとんでもないといふ訳だ。中食や夕食には牛肉もでる。そのとき子牛のためのミルク、ミルク製品は禁止である。従ってデザートもクリームやミルクをつかはないものが出る。甘味はたとへばハチミツだ。コーヒーにミルクとかクリームを入れることもできない。豚と豚肉の製品 (ハム、ベーコン、ソーセージ等) も禁止。

勿論こうした厳密なきまりは、誰でも入ってこれる [従ってユダヤの規則に忠実な (小うるさい) ユダヤ教徒も入ってこれる] レストランや大学・研究所の cafeteria などでは、文句がつけられぬよう、ユダヤの規則に則った食事しか出さないのだ。

だから朝食にはミルクコーヒー、ティー、卵やチーズ、魚 (ヘリング、サーデイン)、フルーツはあっても、ハムやベーコンなど豚のものは一切ない。

友人の家によばれ、うるさいユダヤ信者がいなければ、多くの (欧米になれ親しんだ) イスラエルの物理学者は欧米なみに自由にふるまふ。

しかし彼等の家の台所にはナベ、カマ、皿、ナイフ、フォークを2セットもつ

てゐる。一つはユダヤのきまりにあったもののため（だから豚などはけっしてふれさせない）で、ユダヤの信者がきたとき使ふのである。欧米流にハム等自由にあつかふにはもう一方のセットを用ゐる。こうしてジレンマを上手にさけるのである。

かういふ訳で子供の食事は朝買いだめたものでまかなふ。勿論欧米に開化したイスラエルの友人によべれた夕食は、全く欧米なみで、ユダヤのきまりとは無縁であった、———といふよりそうした「自由なユダヤ人」しか非ユダヤの友人にはなりにくいのである。僕のワイツマンにつとめる友人（物理学者）は皆開化した人たちだった。だから彼等に夕食に招待されたときは、子供のミールも含め、全く普通である———欧米なみ。

ミールについての蛇足

ヴェジタリアンでミルクやミルク製品（バター、チーズ）をたべる者は少ない。インドのヴェジタリアンで卵を食べる人（物理屋）に出食はし（日本への visitor だった）、いささか驚いたことがある。

アラブの人たちは、ユダヤと同じく豚をたべない。更にアラブ人はコーランの定めに従って殺した羊、山羊、ラクダ、.....しかたべない。国際会議などでモスレムの人達をパーティやディナーに呼ぶ時にはホスト側に心の準備があった方がよい。ヴェジタリアン対策も必要で会議前に食事についてのアンケートをとっておくのがよい。

China には唐の昔から（特に元朝以降）モスレム（清真教徒）が多く住みつき、一寸した町や村でも清真教徒のための肉屋やレストランがある。China の大学の国内及び外国の学生用宿舎には、自炊用の台所（ナベ、カマ、サラ、ホウチョウ、....つき）があるが、必ず Chinese 用とモスレム用の 2 つがあつて、国内の清真教徒のみならず中近東からのモスレム系留学生が困らないようにしてある。

ワイツマン研究所 Weizmann Inst. Of Science

ワイツマン研究所の周辺は樹木や草花にみちみちてゐた。しかしよくみると定時的に散水できるような仕掛（シカケ）が整つてゐて、時折水を草花に与へてゐる。だからこそ———といふよりは水を時々与へるようにしてあるから、草や木が研究所や周辺の guest house, staff の住居の周辺が緑と花にあふれてゐたのである。イスラエルは乾いた沙漠の多い土地である。

研究所の中には欧米の大学・研究所なら普通にみられるような偉大な学者の肖像や写真は一つもない。ユダヤの立法によれば形あるものをきざんで崇拝（尊敬）の対象にしてはならないからだ。Einstein や Bohr の胸像等も寄与されて所有してゐるが、一般見学者の目につかない地下室の某所にしまひこまれてゐる。

ワイツマンはノーベル賞をもらった chemist。また Israel の初代大統領。彼

の名を冠したのが Weizmann Inst. なのだ。物理・化学、....と色々やってゐて日本の理研みたいなものだ。

ワイツマンのゼミナールでは毎日一回話したと思ふ。僕の仕事のほかに、Th. Div. でどんな話題 (ν -reaction や SU_3 も含めたとおもふ) があるとか、CERN や BNL の実験についても討論した。当時 QED の possible break down も fashionable で、いろいろな試みがあった。そんな話をしてゐて、結極どうなんだと聞かれて Many calculations but no thought と答へた。この一句、イスラエルの友人にあふたび、何 10 年にもわたって、お前のこの一句は今もおぼえてゐるといはれた。

ワイツマンで会った人々は

Amos de - Shali (ワイツマン所長、核理)

Lipkin (核理、 SU_3 後素粒子論に変わる)

Talmi (核理)

J. Eisenberg (emulsion、宇宙線でできた cascade hyperon の candidate をみつけた。のち H.E. exp)

G. Yekutieli (emulsion の宇宙線屋)

etc である。上に記した人は夕食に我々 3 人をよんでくれた。小さい子のイタヅラにずい分迷惑をかけたこともある。

ANL から UK にサバティカルできてゐたシェーファーも同じ頃ワイツマンへ visit してゐた。Mössbauer effect をつかって Lab exp. でスペクトル線の gravitational red shift を明示した ——— 腕のよい実験系である。

ワイツマンで働く研究者達はすべて欧米で教育をうけ学位をとったものばかり、ワイツマン (大学院がある) やイスラエルのあちこちでは大学づくりに大童。イスラエルに生れ育ち、教育されて学位をとるのがでるのは、Harari の世代からである。

Amos や何人かの家にはピアノがあり、又美術本や大冊が本棚に並んでゐた。当時流行した HiFi のレコード版も沢山あった。その中でも Y の目についたのはバイブルに関連した考古学の成果を書いた 2 冊の大型本 (各 25 ドル) であった。一つは写真集、一つは古文書 (エジプト、スメール、バビロニア、アッシリア、ヒッタイト、....ピブロス、...) のコレクション**である。Illinois に居たとき Univ. of Chicago press のこの大冊に手が出なかった。それが、ワイツマンで我々を invite してくれた家のどこにもあった。Amos にきいたら、イスラエルでは旧約を小学校で習ふので、(科学者なら) 誰でもそこにかいてあることの考古学的 “証明” に関心があるんだ、とのこと。

さう云へば CERN の Th. Div. の Head をしばらくつとめた M Fierz は考古学、人類学について何でも知ってゐた (尤も、Jauch によると Fierz は知ったかぶりの名人だから文字通りとるなと僕にこっそりいつてくれたが)。Fierz は第一次大戦後の Wien で Jensen (人類学者) から人文系新進の学者達と親交があり、とびぬけて学識 (万学に通ず) があつた人だ。

Amos はあとでナゾナゾを教へてくれた。「母が子に云ふ。 お前のおじいさんは私の夫。 さて私は誰でせう？」 ソドムの町の運命を知る者ならすぐ答られる。

イスラエルあれこれ

Shopping のとき Amos がワイフの車で助けてくれた。 Mrs. De-Shalit は医者なので、往診中はどこへ駐車しても OK である。 それで Amos は、平気で illegal parking をする。 仕事の能率は上々。 医師は便利なものとおもう。 勿論 police にバレたら大事だが。

イスラエルに約 1 週間居たが、その間に Amos の車でエルサレムやアスケロンへつれていってもらった。

当時エルサレム旧市はヨルダン治下で、新エルサレム（イスラエル治下）にあるダヴィデホテルの屋上から旧市街をながめただけだ。 ヘブル大学はイスラエル側だったからそこへ行って死海文書を見学した。 当時イスラエルからヨルダンへの入国は可能で、エルサレムの旧市街へ入れたが、一旦国境をこえるとイスラエルへは戻れない。 ベツレヘムも、名あるエルサレムの旧跡もすべてアラブ治下なので、遠くから眺めるだけ。 残念至極。

アスケロンへは（ヨリコ、ユキオをワイツマンにのこして）Amos とその長男と一しょに Amos の car で行った。 サムソンが倒壊したと云ふ Temple のあとをみた。

イスラエルの人々

イスラエルは人類のるつぼのように思へた。 皆ユダヤ教を信じユダヤ人なのであるが、何千年も住んでいるとどうしても現地人とにてくる。 アフリカやインドからきたユダヤ人は夫々アフリカやインドの人とそっくりの顔をしてゐる。 英独佛伊西露に長く住んでゐたといふユダヤ人たちは夫々の国の人と何かしら似かよってゐる。 シナゴークで何百年と伝承されてきた、おいのりや歌も、字で書けば同じなのによみ方うたひ方にお国ぶりがある。 やはり北米や西欧からきたユダヤ人の方がアフリカや中近東・インド亜大陸からきた人たちより豊かさうだった。

脚注

- ** パピルスや粘土版の有名乃至重要文書の英訳がもうらしてある。 ギルガメシュの物語、ハムラビ法典、死者の書 etc, etc...
-

イスラエルでのエクスカージョンの一つは、マサダへの旅だった。ユダ アイゼンベルグ、タルミ等と visitor である Y と (Argonne からの visitor) シュリファーら 7~8 人が車 2 台に分乗しての旅だった。

ラホボからベールシバへ南下、死海の南端へでて、その西岸を北上して、マサダへゆく。当時アラブのテロの頻発地であったのでベールシバの先でイスラエル軍の検問所で足どめをくらふ。ユダがどうしてもマサダへゆきたいと交渉し、何があらうとも我々の責任でゆくといふ一サツ (イッサツ) を入れてようよう死海の方へゆけた。そのため死海は眺めるだけ。手をつけ 1 分でも泳ぎたかったのにその時間の余裕がなく、死海のほとりを、たゞひたすら北上する。ひどい道だ。対岸 (東岸) の坂山の洞穴が死海文書の出た所と聞く。今ならケーブルカーでマサダの廃墟までゆけるそうだが、僕たちのいったときは死海の海岸で car からおりて急な坂道をマサダまで登山した。登って 4 年も死守したといふマサダの廃墟をみる。雨水をためる貯水池がいくつもほられてゐる。よくぞこんな所で何年も頑張ったものだと思ふ。死海の海岸にひろがる平地には、上からだるとローマ軍の兵営、マサダを封鎖した長城のあとがよく見えた。

イスラエル語

新生イスラエルが独立宣言後、まづやったことはイスラエル語の創成である。イスラエルの文字は右から左への横がき、子音のみで、文には母音を入れない。これはくさび型文字やエジプトの古代文学と同様、文に母音を入れない方式である。

話し言葉としてのイスラエル語はローマにユダヤが亡ぼされて以後、次第に失はれていった。それに、イスラエルの民が各地 —— 東・中・西欧、アフリカ、中近東からインド—— に離散して 2000 年もたつと、シナゴークで歌う神への賛歌のうたい方にも差がでてくる。これはラテン語を母語とするラテン系の今のコトバがイタリア、スペイン、フランス、ルーマニア、...でちがふこと、又教会でうたふラテン語のよみ方が各地でちがふことと同様である。それ故、新生イスラエルでは歌、パレスティナ等近隣のモスレムの発音等を勘案し、言語学者等専門家と政治家よりなる委員会で「新生イスラエル語」を創成し、これを教育の場とラジオでひろめたのである。これは明治政府が維新後、標準日本語をつくり出したのにやや似て居よう。ラジオが既にあったことは、日本の場合よりイスラエルの方が有利だった。

音楽家たち

さう云へば、旧ソ連では、バレエ、オペラ、音楽については classic は一流、しかしスターリン後の新作はいただけないものが多い。

一流の音楽家や作曲家、演奏家の中には東側でも西側でもユダヤ系の割合は高い。かうしたユダヤ系の音楽家たちは、殆どがキエフ及びその近辺 (数 100km 以内か) の古いユダヤのシナゴークの音楽担当の家系に由来してゐる。メニューヒンもコーガン、

... と数へ上げればキリがない。音楽の才能が何 10 世代にもわたってうけつがれてゐるといふ訳だ。ユダヤ人の音楽の底力をみせつけられる想ひ。ユダヤ系がめだつのは科学や大金持（ロスチャイルドや石油王、等々）に限らない。

Weizmann Inst. の予算

この第一回のイスラエル滞在中に、Weizmann Inst. の senior staff らは million dollar deficit と云ひあつてゐた。よく聞くと予算年度がまだ半ばだと云ふのに、（少くとも物理では）もうすでに予算を 1×10^6 ドルも超越してゐると云ふのである。日本では考へられないことだ。何でも研究熱心の余り金をつかつてゐる中に気がついたらかうなつてゐたといふ。どうして解決するのか興味津々で聞いてゐる中に、どうやらイスラエルではどんどん研究費を使ひ、誰も予算を余り気にしないらしい。予算が足りなければ、Inst. の head がアメリカへいって（ユダヤ系の）金持ちの間に帽子をまはせば、不足分位すぐ集るといふことであるらしい。事実この million dollar deficit も Weizmann の director、Amos の「募金」集めで事が収ったとか。

イスラエルの国と民の富よりも、イスラエル以外特に北米や欧州にゐるユダヤ系の会社や事業主、金持の富の方がケタ違ひに大きいので、イスラエルの国の予算で物事がまかなはれてゐると見るのが、そもそも見当違ひなのである。

同じような事はギリシャについても云へるのかも知れない。ギリシャ内の富よりもギリシャ以外の国に住んで活躍するギリシャ系の人々の富の方がはるかに大きいのである。アルメニア人も同様といへようか。

さういへば、戦後 Oppen が IAS の所長になったとき、Oppen が帽子をまわして不足分の研究所予算をたちどころに調達すると聞いた。（Von Neumann の computer の R&D でお金がうんとといったこともあらう。）どこにゐてもユダヤ系の人のやることにすっかり感心した。

キブツ

第一次大戦後、世界各地からユダヤの人たちが約束の地へともどつて来た。金持が多くはなかった。そこでキブツと云ふやり方があちこちにつくられた（集団農場の一種）。私物を殆どみとめず、下着も含めて共有財産で農・牧を行ふ。新生児も乳ばなれすれば、子供達は共同でそだてる。財産は共有。仕事も共働。

子供達は兄弟姉妹のように育てられて、成年に達しても couple になる者は稀とか。これがキブツにとってよそからの嫁さがし、婿さがしといふ難題をもたらしたとか。

キブツに合はなくなった成人は、職をさがしてキブツを去る。ユダ アイゼンベルグもこうした経歴の持主だった。

「運りつるホース」
毛氈下の人民解放に
にゐるが

党中央の指導でこのキブツ
の成人には民衆の
運命がちな。

乾いた土地 イスラエルの古代植樹

イスラエルは乾いてゐるので、植生・農業のための水の確保はこの上なく大切である。ヨルダン川の水の利用 ——— 配水のしかた ——— は常に外交とかかはる。

ヨルダンの水をひいての農地拡大作は1960ごろにはじまったばかり。

こゝで古代の知恵も生きてくる。イスラエルの多くの部分で雨が少くても昼夜の温度差が大きい。海からの湿り気をおびた空気は夜露をもたらす。木(オリーブ、等)の、まわり(木から少しはなれた円周上)に石を荒くつんで円い垣をつみあげると、夜露を効果的にとりこんで1本の木を支えるに十分な水が得られる。木をまばらに植えておくと(密に植へると水不足になる)けっこう木の実の収穫がある。しかし木を切りスカスカの石垣をこはせば、もとの草木のない荒地になってしまう。2000年以上前にはこうした方式でオリーブなどの疎林があった。のちに木を切られ、世話するものもなくなって荒地になった。そこで昔の方式の復元も試みられてゐる。これならヨルダン川の水をひかなくてもそこそこの収穫が上る。木を植へる密度は永年のカンできめられるさうな。古代の智恵はすばらしい。

発展期のイスラエル

1960ごろのイスラエルは独立後世界各地からユダヤ系移民が「約束の地」に帰国し、人口増は新生児より移民の方が多かった。到る所開発のラッシュの筈だったが、1960前後では、日本の初オリンピック前の東京に比べれば、ずっとのんびりしたペースだったやうに思ふ。

イスラエルが急激に様がはりするのは1960年代おはりごろからではなからうか。

エクソダス、ギリシャへ

pass over が近づくと我々はイスラエルをはなれた。我々がラホボを去る時、欧米からユダヤ系の人たちが pass over を故国でむかへるべくイスラエルへやってくる。その一人が Marry Gell-Mann だった。挨拶して別れる。

帰りはギリシャに6日ほど寄った。3日間はギリシャ AEC の invitation、のこりの3日間は観光。CERN の Th Div. に Kanelopolous という中年になってから工学者から核屋に転向したギリシャ人がゐた。彼はギリシャに帰って、ギリシャの AEC の高官になった。AEC はデモクリトス研究所といふ原子力・原子核の研究所をつくった。Y は AEC のコンサルタントとして invite されたい。ギリシャの原子力研究について advice をもとめられ、AEC 主催の dinner にもよばれた。

のこりの3日間はアクロポリス、考古学博物館などをまわってすごした。

ギリシャはオリーブオイルをたっぷりつかふ。どの料理にも、サラダもオイルづけと我々には思へた。6日間、オリーブオイルの過剰にまゐった。

ギリシャはイタリアと並んで、魚の市場にタコが並んでゐる。 ミノア文明以来タコを食するのがギリシャ人だ。

イスラエルへの旅（1960）への追記

「ラホボ着」への追記

テル・アヴィヴ空港から Weizmann Institute (WI) 迄、WI の car で送られたことについては既に触れた。WI の guest house に着いて、その中にある諸道具（電気機具等）の使い方を教えられた。主に WI の cafeteria の場所、朝食に何があるか、又その注文の仕事、特に 1 才の幸夫のためのミルクの買ひだめ等、事細かに注意を受けた。なれない異邦人への暖い心くばりである。多分 Amos の指示であらう。欧米から里帰りのユダヤ系 visitor と違って、Yy はタブラ・ラサだったからだ。中食迄には Wi の物理屋に会ふので、中・夕食についての注意はなかった。だが、ミルクが買へるのは朝だけだから、幸夫用に必要なだけ、朝のうちにミルクを買ひだめをするようにすすめられた。Guest house の room の中には小さな冷蔵庫があった。

翌朝 WI の cafeteria に朝食をとりにゆく。西欧の大学・研究所の cafeteria とハードの部分は似てゐるが、food の様子は全くの様変わりである。ミルクやミルク・プロダクト（朝食のときだけださうな）があり、コーヒー、紅茶、パン、ピタ（広く中近東で食べられている薄焼きパン。インド・アフガニスタンではチャパティーと呼ばれる発酵しないパンのこと）はあるが、毛物の肉類は全く見られない。魚はあった。鱈とかニシンの油（水？）びたし、何やら野菜（ハーブ）のついた液体につかってゐる。オランダ様のニシンかな？ バナナ、オレンジなど菓物はあった。勿論欧米でみなれたハム、ソーセージ、セラミ等豚のものは一切出るはずもない。朝はコーヒーや紅茶にミルクを入れた。

WI の cafeteria の中・(夕)食には牛肉がでる。イスラエルでは牛や羊なぞの親子をとりまぜてはいけない。牛肉の料理がでると、食事中に仔肉用のミルクを混ぜてはならないのがきまりである。だから中食後コーヒーにミルク(やクリーム)を入れてはならないし、デザートもミルクの混入は駄目といふ訳である。日本の親子丼などイスラエルではもっての他のものである。

また鱗のない魚（海の生物）も食べてはいけない。タコ、イカなどがそれらに該当する。

「イスラエル語」への追加

Racah は Racah 係数をみつけた数理物理学者。北イタリアに長く住みついたユダヤ系の人。先祖を 1000 年もたどれると云ふ名門の出。

Galileo, Torcelli（真空度を表はす単位 Toll に名が残る）、Volta（電圧のボルトに名を残す）以後、(物理の主流はアルプスを越え、英・ベネルクス・佛・独・奥に移って)

沈退したイタリアの物理学を、Enrico Fermi が復活させた頃、ローマの北のイタリアにあって、頑張ったのが Racah は Bernardini、Rossi (CR 屋、Coincidence circuit を発明、戦争直前アメリカに渡り、CR、特に nuclear interaction と air shower で活躍、のち X 線天文学の創始者として活躍、小田稔の師匠) とともに、イタリア物理学の覇を競ったのであった。Racah はイスラエル建国を喜び、先祖の故地に里帰りした。しかし老年の Racah は、若者と異り、もはや新生イスラエル語を修得しえず死去した。

「キブツ」への追加

キブツは第一次大戦後 (従ってイスラエルといふ国はできてゐなかった)、イスラエルの故地に世界各地から、もどってきたまづしい人々のためのものだった。欧米に居る豊かなユダヤ系の金持の援助で、土地を買ひ必要な建物や農・牧道具をそろへて出発できた新共同生活の職場だった。

ソ連のコルホーズ、毛澤東指導下に進められた農村の集団農団に似てゐる面が多い。

第二次大戦までのキブツは平和的にふえて行つた。イスラエル独立後は様相が一変し、周辺のアラブ諸国とくにパレスティナ人との関係は、最早平和的とは云へなくなる。

イスラエルの VISA

イスラエルへ行く前、イスラエルの VISA を Bern の領事館にとりい行つた。これが Geneva に最も近いイスラエルの領事の居る所だったからだ。よい Bern 見物の機会ともなった。

Amos 等 CERN の友人達からの教会で、旅券にでなく、別の紙の VISA にしてもらつた。旅券にイスラエルの VISA があると、その旅券持参者はアラブの国々に行くとき、アラブの出入国管理事務で入国を拒否され、国外退去となるからだ。その頃、アラブの国にゆく予定はなかったが、エジプト等へは今後是非行きたいとは思つてゐたので、Amos の忠告に従つたのだ。

尚、再言するが、イスラエル領の新エルサレムから、ヨルダン治下の旧パレスチナには入国できた。しかし一旦アラブの治下の国に入ると、そこから直接のイスラエル領への再入国はできない時だった。

それで今回のイスラエル行きに当っては、残念にも、旧イスラエルやベツレヘム等ヨルダン治下の名所めぐりはすっぱりとあきらめた。

休み（エッセイ）

江戸時代、町の商家に勤める使用人の休みは、お盆と正月だけだった。盆の休みには、一晩泊り（位）なら、丁稚や小僧の親元帰りも許された。

明治開化とともに、日本にも「土曜半ドン、日曜お休み」の方式が輸入・施行された。僕の学校時代もこの休みのスキームが踏襲されてきたし、役所・銀行もこれに従った。しかし日本のデパートはこのスキームをとらず、百貨店は週の working day のどれかを独自に休日とし（火とか木、或は金曜）、週末の書き入れ時は営業してきた。欧米では（キリスト教徒の営業する）店や百貨店は日曜休みを厳守し、日本からの旅行客を戸惑はせたものである。逆に欧米から日本へ来た客人は、デパートで日曜に買物が出来て大層便利と大喜び。

しかし、欧米でも、ユダヤ人の経営する店等は土曜が休みである。欧米で土曜が休みの食料品店（ユダヤ専用の食料品店は、Chinese のと共に世界中の町にある）等に出会せば、owner がユダヤ系にきまっていた。

イスラエルでも、すべて（役所、学校、研究所、オフィス、店、百姓・・・）が土曜休日である。イスラエルの一日はユダヤの決まりによれば（モスLEMと同じく）夕方（日没）から始まる。百姓も牧人も土曜は休み。誰も働いてはいけないのである。土曜は料理（労働）ができないから金曜につくっておいたものを食べる。牝牛の乳しぼりも土曜は禁止。しかし牝牛の乳がはって苦しがるのであれば、乳を搾る。これは牛を助ける為で、しぼった乳は桶に入れたまゝ、牝牛の側に置く（桶をあまり動すと、労働した事になる）。牛が乳桶を蹴飛ばそうとほったらかし。だから土曜にタクシーを呼ぶ訳にはゆかない。（運転手が働くことになる）。汽車もどうしても運転しなければならないものを除いて休み。ユダヤの律法はイスラエルの公的行事に於いては守らなければならない。少数とは云へ、律法違反に目を光らせる人々があるからだ。誰でも出入りできるオフィス、銀行、レストラン、デパート、学校、商店等々は文句が来ないよう、ユダヤのきまりを守らざるを得ないのだ。（「イスラエルの旅」参照）。

ユダヤ人にとって、土曜に働いてよいのは戦場の軍隊（戦争のとき相手が休んでくれる訳がない）と救急医だけ。出産も放置出来ぬ。働いてもよいと認められるのはこの位だったかな。これが伝統的なきまりに忠実なユダヤ人のありようで、それはユダヤ人が何処に居ようとイスラエルの国内外で同じことなのだ。

ユダヤ
土曜が
休みの
客の
店等も
土曜で
閉める
に

因みにモスレムの休日は金曜日。キリスト教、ユダヤ教、マホメット教で休日が1日ずつ早くなる(日→土→金)。宗教の uniqueness の為には同じ曜日の休みは困ると云ふ訳か。

江戸時代の相撲とりは「一年を二十日で暮らすいい男」と云はれた。当時大相撲は一年二場所(春・冬)2×10日間だけだった。今は、六場所6×15日働かされる。多すぎて相撲とりの怪我が絶えない。

ちなみに 1950-1960 ころの Genève 州の小学校は子供達がかねないように、木曜と日曜が全休だった。

休みのとり方は人々により所により様々である。